

27D-pm08S

薬効の評価や副作用の早期発見をバーチャルで体験！薬剤師のためのフィジカルアセスメント学習教材の開発

○今田 美里¹、徳永 仁¹、小笹 彩花¹、興梠 靖幸²、小野 知佐¹、西村 秋恵¹、緒方 賢次¹、瀬戸口 奈央¹、甲斐 晃弘²、松岡 俊和¹、佐藤 圭創¹、高村 徳人¹（九州保福大薬¹、²千代田病院薬）

【目的】現在、薬学生や薬剤師は薬効評価や副作用の確認の際に重要な技術となるフィジカルアセスメント（PA）について学内臨床実習や生涯教育研修会をとおして学んでいるが、学ぶ機会は限られているように思える。そこでPA技術をトレーニングするための学習教材を開発した。今回は学生の評価と合わせて報告する。

【方法】医療現場において遭遇すると想定されるシナリオを30編作成した（病院6編、薬局16編、在宅5編およびドラッグストア3編）。シナリオには、処方薬服用前後における患者背景、薬効・副作用の確認の際に根拠となる心音（正常音、3音、4音など）・肺音（正常音、喘鳴音、捻髪音、水泡音など）・腸音（正常音、亢進、減少など）、身体学的所見を示す各部位（顔、眼、口唇、口の中、首、肩、腕・手・指先、足・指先など）の画像や質問24項目（痛み、吐気、便秘、下痢、食欲、かゆみ、お腹の張り、震え、尿の色の変化、赤い斑点などの有無）、橈骨静脈の触診（脈拍、リズム）、医療機器から得られた数値（体温計、血圧計、パルスオキシメーター、携帯型心電図計、自己血糖測定器）を組み込んだ。教材はWeb形式とし、画面上の患者アバターとの対応や質問から得られた客観的および主観的情報、自らの採取を可能としたバイタルサインや各種医療機器からの数値さらには臨床検査値も参照可能にした。学生による評価は無記名式アンケートで行った。

【結果・考察】学習者はホームページ（HP）において、患者アバターに質問や身体学的な観察を行い薬効や副作用の確認を行いながら、薬剤師としての受診勧奨、他医薬品への処方変更などがバーチャルで体験できるようになった。また学生の学習教材に対する有意義度は高く評価された。一方で、難易度はちょうどよいと評価された。HPは“バーチャルフィジカルアセスメント”で検索、利用可能である。